イスラーム世界研究　第 9 巻（2016 年 3 月）144–148 頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 9 (March 2016), pp. 144–148

アキール文庫に含まれるダカニー・ウルドゥー語文学コレクション［C201–208, C301–307］*

北田　信**

The Books on Dakanī Urdu Language and Literature in the Aqeel Collection, Kyoto University

KITADA Makoto

Dakanī is the group of languages spoken in Deccan which are usually considered dialects of Urdu. Written in Arabic script, it has a long literary tradition since at least the 15th century. During the Bahmanī, ʻĀdil Shāhī (Bījāpur) and Quṯb Shāhī (Golkonḍah, Hyderabad) Dynasties, i.e. the three Muslim dynasties based in Deccan, writers of literature were very active in contrast to Delhi where writing activities adopting Urdu as the literary language did not begin substantially until the 18th century. Thus, Dakanī literature can be considered a very significant precursory phase in the history of Urdu literature, in which various literary inventions and experiments were conducted.

The Aqeel Collection includes about 400 books dealing with the Dakanī language and literature and more than 200 books on the local history of Deccan. These books are becoming less and less available all over the world, and even in India. In such a situation, the fact that the Aqeel collection possesses so large an amount of books related to the matter is a very rare case of invaluable importance.

In addition, this collection has the following strong points:

It covers almost all the authors (poets) considered as great masters representative of the literature of Deccan such as ʻĀdil Shāh II, Nuṣratī, Qulī Quṯb Shāh, Wajhī etc. Not only the original texts of the literary works, but also the analysis and detailed studies of these works, the authors' lives and the historical, social and cultural background are contained in this collection.

This collection also includes authors *around* the great masters, i.e. poets belonging to the same school as, or contemporary with the masters. Such poets might certainly be less known to us, but the study of such poets would enable us to attain a deeper and richer comprehension of the background of these masters, and the literary language and stylistics which they partly inherited from the school they belonged to and partly invented by themselves.

Considering these advantages, it is highly expected that the study of Dakanī literature which has so far been relatively little cultivated, will opened up more in the future, bringing to light the early phases of the development of Urdu literature.

アキール文庫にはダカニー・ウルドゥー語文学関連文献が 400 冊程度収蔵されており、さらにデカン地方史に関連する文献も 200 冊以上がある。デカンおよびダカニー・ウルドゥー語文学に関する書籍は、インドですら入手困難になりつつあり、これほど大量のコレクションは世界的にも珍しい。

*　本稿は、科学研究費プロジェクト「南アジア諸語イスラーム文献の出版・伝播に関する総合的研究」（課題番号 24320017）の研究成果の一部である。
**　大阪大学大学院言語文化研究科准教授

今日、ウルドゥー語の古典文学として一般的に読まれるのは、18 世紀以降、デリー・ラクナウーをはじめとする北インドで著された作品である。なぜなら、18 世紀になるまで、北インドではウルドゥー語ではなくもっぱらペルシア語による創作が行われていたからだ。

ウルドゥー語文学揺籃の地は、北インドではなく、むしろ周縁に位置するグジャラートやデカンである。特にデカンにおいては既にバフマニー朝時代（AD1347–1527）より、ウルドゥー語の一方言ダカニー語（ダカニー・ウルドゥー語）を用いた文学伝統が始まっていた。ダカニー語文学の伝統は、デカンのゴールコンダ（Golkonḍah）およびハイダラーバードを首都としたクトゥブ・シャーヒー朝（Quṯb Shāhī, AD1512–1687）、そしてビージャープル（Bījāpur）を首都としたアーディル・シャーヒー（‘Ādil Shāhī, AD1489–1686）朝に受け継がれ、数多くの珠玉の文学作品が生み出された。

デカンはヴィンディヤー山脈とナルマダー川で北インドから切断されており、そのため、デリーの影響の薄いところで、独自の文化を育むことができた。また、北インドの政権から分離独立して自らの主権をうち立てたデカンの支配者達は、北インドとは異なる独自性を強調する必要があった。そこで、デカンの現地語による地方色が濃く個性豊かな文芸・芸術を盛んに奨励振興した。このことが、デカンでペルシア語だけでなくダカニー語による文芸が栄えたことの大きな理由である。また、デカンにイスラームを広めようとしたスーフィーたちは、現地の民衆に分かる言語（ダカニー語）を用いて布教を行った。その際、ヒンドゥー教徒の土着的な神話伝説を、イスラームの信仰や教義を説明するための喩え話として利用した。これがダカニー語による文芸活動の発生の契機となったとも考えられる。

こうした背景のもとに生まれてきたダカニー語文学作品は、ペルシア語文学に比べて、民衆により近く、作者の個性をはっきりと打ち出していた。北インドからの差異を強調する必要ゆえに、民衆的であることや個性的であることが肯定的な意義を持ったのである。

デカンでダカニー語による創作が盛んに行われていたのと対照的に、ムガル朝下の北インドでの創作は長いことペルシア語で行われ、ウルドゥー語は民衆の話し言葉としての低い位置に甘んじていた［松村 2008: 27］。

デカンで大きな発展を遂げたダカニー文学は、詩人ワリー（Walī, AD1707 年頃没）の登場によって頂点に達する。ワリーの詩集がデリーにもたらされて人気を博し、それまでペルシア詩中心であったデリー詩壇に大きな影響を与え、18 世紀になるとデリーの詩人たちもウルドゥー語で詩作を始めるようになる［松村 2008: 27］。

今日、我々がウルドゥー語の古典文学として学ぶものはワリー以降、つまりムガル朝衰退期に著された作品群であるが、上に見たようにデカンにはそれに先立つ約 300 年の長い文学伝統があった。ワリーからガーリブまでのウルドゥー古典文学の輝かしい業績、さらに近現代におけるウルドゥー語の旺盛な文芸活動は、デカンの地のダカニー語による文芸伝統の長年の蓄積なくしては生まれ得なかったものなのである。しかし残念なことにダカニー語による作品は、ほとんど読まれなくなってしまっている。ダカニー語は北インドの標準的なウルドゥー語とは異なる独自の語彙を多く持つほか、サンスクリット語からの借用語も多く含み、それらが、母音を不完全にしか表記できないアラビア文字で書かれているため、現代の一般のウルドゥー語読者にとり理解するのが難しい。こうした不人気を反映して、ハイダラーバードを中心として出版されてきたダカニー語古典文学の書籍の多くは、現在では入手困難となっている。しかしアキール文庫には、ダカニー語文学研究に必要な基本的資料がほとんどそろっており、これらを用いて学術的な研究を行うことが可能である。山根聡氏も述べているとおり、ダカニー語文学関係書籍がこれほど揃えられている図書館は

日本では他になく、世界的に見ても多くはない。ダカニー語文学を扱う（扱う能力を有する）研究者の人数は減少しつつあるが、将来、若い世代の研究者が京大アキール文庫を利用して、ダカニー語文学という未開拓の部分の多い領域の研究を押し進めてくれることを期待したい。

以下に、アキール文庫ダカニー語文学コレクションに含まれる書籍を幾つか紹介する。

ダカニー語の辞書としては現在、［Ja‘far 2008］（全 521 頁）が比較的入手しやすいがそれほど語彙が多いとは言えない。ダカニー語の文学作品を読む際には、この辞書のみでは不足を感じることが多い。幸い、多くの原文テキストには巻末に語彙集が付されており、それを参照しながら読解していくことになる。（とはいえ、これらの巻末語彙集も簡易的なものであってしばしば困難に遭遇するが。）アキール文庫には 1969 年に出版された辞書 Mas‘ūd Ḥusain Khāṇ & Ghulām ‘Umar Khāṇ, *Dakanī Urdū kī Lughat*（AQEEL||C||301||16）が所蔵されている。分量は［Ja‘far 2008］とそれほど変わらないが、二つの異なる辞書を比較検討することができるのは便利である。

ダカニー語を言語学的に分析したものや文法書も入っており、たとえば Shrī Rām Sharmā & Maulavī Ghulām, *Dakanī Zabān kā Āghāz aur Irtiqā*『ダカニー語の始まりと発展』（AQEEL||C||301||8）（全 507 頁）は、ダカニー語の歴史的発展、特に音韻変化に詳しいが、同時に網羅的な文法書ともなっている。一方、Ḥabīb Ziyā’, *Dakanī Zabān kī Qawā‘id*『ダカニー語の文法』（AQEEL||C||301||16）では、全 281 頁にわたって、文法項目ごとに文学作品からの具体的用例（詩歌）が引用されているのが有難い。

ダカニー語の文学作品、詩人についての書籍は数多い。

デカン・バフマニー朝の詩人ニザーミー（あるいは Niẓām Fakhar Dīn）がインド土着のお伽噺に題材を採った物語詩『カダムラーオ・パダムラーオ』は 15 世紀中頃に著されたと推定され、ダカニー語による現存する最古のマスナヴィーである。北インドを起源とするダカニー語がデカンに伝わってからおよそ一と四半世紀が経った頃であり、ダカニー・ウルドゥー語がまだ粗削りだった段階にあたる［Kāshmīrī 2009: 80ff］。所蔵されている Niẓāmī Dakanī, *Maṡnavī Kadam Rāo Padam Rāo*（AQEEL||C||201||4）では、写本のファクシミリと、それを読みやすいナスターリーク書体に書き起こしたテキストと左右に対照させて並べてある。ナスターリークの読みは時折、写本の綴りと食い違いを見せ、この作品の持つ難解さが垣間見える。詳細な前書、作品分析および著者・時代背景に関する解説が付いている。

クトゥブ・シャーヒー王朝の最大の王、ムハンマド・クリー・クトゥブ・シャー（AD1612–1580）は、精力旺盛な為政者であり、遠征を盛んに行ってゴールコンダ王国の範囲を最大に広げ、新王都ハイダラーバードを建設した。しかし、同時に女と酒をこよなく愛し、快楽に耽溺する私生活をあけすけに詩に詠んだ。ダカニー文学を代表する個性的な詩人とみなされる。

クリー・クトゥブ王の優れた詩人としての面に焦点を置いた評伝・研究が、アキール文庫にはいくつも入っている。たとえば Sayyad Muḥiuddīn Qādirī Zor, *Sulṯān Muḥammad Qulī Quṯb Shāh*（AQEEL||C||201||1）は、評伝および彼の著したダカニー語・ペルシア語による詩の例を収める。Aslam Parvīz, *Sulṯān Muḥammad Qulī Quṯb Shāh*（AQEEL||C||202||29）では、前半はかなり詳細な研究書であり、後半は原文テキストとその語彙集である。また、Niṡār Aḥmad が 2009 年にスィンド大学に提出した博士論文 *Farhang-ĕ-Muḥammad Qulī Quṯb Shāh ma‘ ḥavāshī ŏ ta‘līqāt*（AQEEL||C||208||6）は、王の作とされる詩に用いられる語彙を用例と共にリストアップしたものである。一口に“ダカニー

語”と言っても時代・地域により差異は大きく、ある特定の時代の一人の詩人の作品に出てくる語彙を集めて用法を分析したこの論文は意義深いものである。

また、王に仕える宮廷詩人であり、王の親友でもあったと伝えられるワジュヒーは、ダカニー語初の散文物語『サブラス』を著した。Ḥamīrah Jalīlī, *Sab Ras kī tanqīdī tadwīn*（AQEEL||C||302||19）は『サブラス』の最も権威ある校訂本とされる。この他にも、Maulvī ‘Abdulḥaqq による校訂本（AQEEL||C||302||12）が所蔵されている。Ḥamīrah Jalīlī の権威ある校訂本とみなされるもののは、複数の写本を比較対照して作られたものであるが、イスラームの教義にそぐわない箇所（飲酒推奨のくだりなど）は意図的に削ぎ落とした、という印象を得た。ゆえに、異なる学者の手になる複数の校訂本が所蔵されているということは、作品のあるがままの姿がどうであったか、を考察する際に、役に立つに違いない。

ワジュヒー作の物語詩 *Quṯb Mushtarī*（AQEEL||C||302||8）は、王子時代のムハンマド・クリー・クトゥブ王を主人公にして、架空のヒロイン・ヒンドゥー教徒の舞姫ムシュタリーとの恋愛を描いたものである。Abulbarakāt Karbalāy, *Maṯnavī Quṯb Mushtarī kā tanqīdī muṯāla‘ah*（AQEEL||C||302||15）は、この作品のテキスト分析・研究である。

ムハンマド・クリー・クトゥブ王やワジュヒーと同時代の詩人ガワースィーについての研究・詩集が一体になったもの Muḥammad ‘Alī Aṯar, *Ghawāṯī: Shakhṯiyāt aur fann*（AQEEL||C||202||8）もある。このように、同時代・同地域に生き、おそらくお互いを知っていたであろう詩人達の作品がまとまって見られるようになっている。

クトゥブ・シャーヒー朝のゴールコンダ王国と並んで、アーディル・シャーヒー朝のビージャープル王国でも、ダカニー語による文芸活動が栄えた。歴代の王は芸術文化を振興したが、とりわけアーディル・シャー二世（AD1580–1617）はダカニー語詩と音楽を愛し、自ら新しい美的感覚を提唱し、歌詞集 *Kitāb-ĕ-Nauras*『新奇なる美的感覚の書』を著した。Sayyad Mubārizuddīn Rafʿat, *Kulliyāt-ĕ-Shāhī*（AQEEL||C||302||2）は、アーディル・シャー二世が著したダカニー語、ヒンディー語、ペルシア語による作品集（原文テキスト）、語彙集、研究を収める。

ヌスラティーはビージャープルの文学伝統の頂点に立つ詩人で、“詩人達の王”と称される人である。その物語詩 *Gulshan-ĕ-‘Ishq*『愛の花園』（AQEEL||C||302||4）、物語詩 *‘Alīnāmah*『アリー伝』（AQEEL||C||302||25）、詩集 Jamīl Jālibī (ed.), *Dīvān-ĕ-Nuṣratī*（AQEEL||C||302||27）が所蔵されている。彼のさまざまな作品を引用とともに紹介したもの ‘Abdulḥaqq, *Nuṣratī*（AQEEL||C||205||4）もあり、作品の原文テキストと、それを位置づける解説書の両方が揃っていることになる。

ビージャープルではイランで書かれたペルシア語の軍記物をダカニー語に翻訳・翻案したものが好まれた。Kamāl Khāṇ Rustamī Bījāpūrī が翻訳した *Khāvarnāmah*（AQEEL||C||207||22）もその一例であり、ビージャープルにおける物語文学ジャンルの文体の形成に貢献したと言われている。所蔵されている校訂本は 800 頁を超す分厚さであり、原文テキストは軍記物に相応しく平明でリズミカルな調子を持つ。この種の翻訳がダカニー語の表現を豊富にしたことは容易に理解される。ヌスラティー『アリー伝』は、史実に基づきアリー・アーディル・シャー王の武勲を讃える軍記物であるが、ビージャープルのこれらの軍記物の伝統に影響を受けている。

ビージャープル王国のダカニー語文学は語彙においても文体においてもゴールコンダ王国のそれとは趣向が異なる。ビージャープルの文学伝統に属する作品として、サナアティー Ṣana‘atī, *Qiṣṣah-ĕ-Benaẓīr*『比類なき物語』（AQEEL||C||302||26）やショウキー *Dīvān-ĕ-Ḥasan Shauqī*

（AQEEL||C||303||11）がある。

このように、ゴールコンダ流派についてもビージャープル流派についても、一つのまとまりをなす複数の詩人の作品や研究が所蔵され、或る一人の詩人とその作品を取り巻く歴史的環境や文学史的前提を理解できるようになっているのは貴重である。

バフマニー、ビージャープル、ゴールコンダというデカンの諸王朝のもとで発達したダカニー語の伝統は、ワリーの詩集に結晶化されてデリーにもたらされ、北インドでの話し言葉（ウルドゥー語）による詩作を促すことになる。

詩人ワリーとその詩集のデリーへの伝来という文学史上の大事件については、人物伝 *Yādigār-ĕ-Walī*（AQEEL||C||201||7）、*Walī Aurangābādī*（AQEEL||C||201||8）、批評・研究 Muḥammad Khāṇ Ashraf, *Walī, taḥqīqī o tanqīdī muṯāla'ah*（AQEEL||C||201||35）などさまざまな種類や性格の書籍が所蔵されている。またワリーと同時代のスーフィー・バフリーの作品 Qāẕī Maḥmūd Baḥrī, *Maṯnavī Man Lagan*『御執心』（AQEEL||C||302||10）や、ワリーに続く時代の詩人スィラージュ *Kulliyāt-ĕ-Sirāj*（AQEEL||C||201||6）とその同時代人カースィム *Dīvān-ĕ-Qāsim*（AQEEL||C||202||21）もある。ワリーの使用した文芸語は、ダカニー語を基盤としながらも、ムガル帝国よるデカン併合の後、デカンの政治文化の新しい中心地オウランガーバードで好まれたペルシア色の強い洒脱な趣味を反映していた。いわばデカンの土着色の強いダカニー語詩が、一旦、オウランガーバードで灰汁を抜かれて北インドの洗練された文化人たちの趣味に合う形に作り変えられたことになる。デリーで持て囃されたのがなぜワリーであったのか、その特異性を知るために、同時代の周囲の他の詩人達と比較して見ることは興味深い研究テーマの一つであろう。

以上、京大アキール文庫所蔵のダカニー語コレクションに所蔵される特筆すべき書籍のうちのほんの一部分を紹介した。これらに劣らぬ価値をもちながら、紙面の都合上、ここに紹介できなかったものも多い。この貴重なコレクションを利用することによって、ダカニー語文学を総合的に深く研究することが可能であり、そのような研究環境が整っているということは世界的にも稀なことである。

参照文献

松村耕光 2008「デカンのウルドゥー文学について」『多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として』（課題番号 17202009　平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書　発行者：水野善文（東京外国語大学・外国語学部）), pp. 27–36.

Ja'far, Sayyadah (ed.). 2008. *Dakanī Lughat*. Qaumī Kaunsil barāe Farogh-ĕ-Urdū Zabān, Naī Dilhī.

Kāshmīrī, Tabassum. 2009. *Urdū adab kī tārīkh. Ibtidā se 1857 īṣvī tak*. Sang-e-Meel Publications, Lahore.

イスラーム世界研究　第 9 巻（2016 年 3 月）144–148 頁

Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 9 (March 2016), pp. 144–148

アキール文庫に含まれるダカニー・ウルドゥー語文学コレクション

正誤表

p. 146, l.15	AQEEL‖C‖301‖16	→	AQEEL‖C‖301‖13